
『ストーカー』と書いて『純愛者』と読むby私

右下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ストーカー』と書いて『純愛者』と読むby私

【Nコード】

N9513J

【作者名】

右下

【あらすじ】

世間一般的に、私を言い表すなら『ストーカー』と呼ぶだろう。

けどそんな下品な名称で、私は呼んでほしくない。だから私は自分の事をこう呼んでいる。

『純愛者』であると。

葵春香が考える、これが本当の『ストーリーカー』
そんな恋愛コメディ小説です。

ああ…素晴らしき春の空。意味もなく澄み渡ったあの青空は、今の私を馬鹿にしているのかもしれない。

いや、きっとそうだ。

分かったわ…負け犬の今の私を馬鹿にしているのね！文句があるならかかってきなさいよお！！

「いつか…いつか倒してやるんだから！！」

私は、人類初とも言える空への先制布告を叩きつけた。

そんな私はトボトボと、学校の近くに流れている川の河川敷を意味もなく歩いている。

特に目的地は無い。このまま隣の県まで歩いてやろうか。

そんな簡素で無気力な思いだけが今の私を動かす原動力だった。

何でふられたんだろう…何であんな嫌そうな目で私を見たのだろう…何で…。

—家までついて行っちゃいけないのだろう。

それは、時を遡る事数時間前。

「ごめん。君とは付き合えないよ…そのお、気持ちは嬉しいんだけど…さ。えっと」

「え、何で？ どうして！？ 私が嫌いなのか？ 可愛くないから？ 別に好きな人がいるから！？」

「い、いや！ 葵^{あおい}さんは可愛いと思うよ？ 本当さ！ だけど…」

大好きな彼の言葉が途中で濁る。なんか言いづらそうな、もじもじと口を動かす。

「だけど…？」

「き、君が…」

「私が…？」

しばらくの空白が空き、彼は意を決したように。大声で、そして力強く私に言い放った。

「ストーカーだからだよ！！！！」

今日一番の大きさで、大好きな彼の声がこの澄みきった青空に響いた。

何故今日一番分かるかって？ だって学校に着いてから、ずっと

見ていたからだよ？

○

そして現在に至るわけだ。

放課後は家に帰る気力もなくなり、こうして無作為に歩いているのだ。

私は、あおいはるか葵春香。町内の高校に通う二年生の、健全な女子高生の一人だ。

自分を出来る限り客観的に考察すれば、まず最初に、勉強面では私はかなり出来る方だ。

運動も人並みより頭一個上で、容姿も自分で言うのもアレだが、悪くはないと思う。髪型は腰まで長いロングヘアー（勿論大好きな彼の好みに合わせて）で、スタイルも特に目立った点はない。

友達関係も上々で、他人との小競り合いなど起きないし、誕生日には友達みんなが私に賛辞の言葉をくれる。

ただ一つ、私に欠点があるとしたらそれはただ一つ。

世間一般的に言うなら私は、所謂『いわゆるストーカー』なのである。

だが、そんな低俗な言葉で私は自分を見ていない。

私は、自分をこう解釈している。

『ストーカー^{じゅんあいしゃ}』であると。

昔っからだ。私は好きになった人を、つねに長くこの目に映しておきたいという衝動が激しかった。

小学校低学年の時は、好きな男子をただ後ろからジーツと見つめるのが日課だった。

だが五年生になった頃には、クラスの中だけでは収まらず、その男子がトイレへ行く時に際も私は後ろから追跡した。

六年生になった時には、学校の範疇を超え、その男子の自宅まで勝手にいて行く程にまでなっていた。

そんな私は六年生のある時、自分がニュースとかで見かける低俗な『ストーカー』であることに気が付いた。

あの時の私は、今まで生きてきて経験のした事のない憤りと虚無感を感じた。

別に自分が『ストーカー』だったからではない。

『ストーカー』という、何とも陳腐で低俗で下品な名称でしか、今の自分を言い表せなかったからだ。

毎日毎日、必死にこの忌々しき事態を打開するための妙案を探していた。

そして、ついに私はある画期的な案を閃いた。

「なんだ、自分で名前を付ければいいんだ」

かくして私は、自分の事を『ストーカー』ではなく『純愛者』として定義したのだった。

「そりゃ最近の私は色々したよ？ 勝手に家までついていたり、毎日ポストに無記名のラブレターいれたり、エトセトラエトセトラ。それなのに：今日やっと勇気を出して告白したのにつ！」

「はあ〜」と大きなため息をこぼし、私はその場に立ち止った。

「結局、今回の彼も私を『ストーカー』として見てたんだ：はあ、いつになったら私の気持ちを理解できる、素敵な男性が現れるんだろう：」

そのまま私は河川敷に座り込み、眼下に流れている川を虚ろな目で眺めた。

日も傾き始め、空の色がオレンジ色に染まりつつある、そんな時だ。右辺の方から誰かが来るのを感じた。私はその方に首を回す。

十メートル程先、ジャージ姿で肩には白いタオルをかけながら走ってくる、一人の男性の姿が見えた。

その男性は随分と足が速く、私が姿を確認した頃には、すでに私のすぐ近くまで来ていた。

「すっすっはっ」と整息をしながら、私には目もくれずそのまま私の後ろを通り過ぎて行ってしまった。

あのジャージ、うちの高校と同じだ。

チラッと見えた彼の顔には、かすかに見覚えがある。

脳の海馬を働かせ、なんとか名前を脳の隙間から絞り出す。

「えっと…あ、思い出した！確か陸上部のエース来栖君だ」
くるす

今まで特に注目した事はなかったが、一瞬だけしか見えなかった彼の顔は、ひたすらに夢を追いかけるカッコイイ顔だった。

「来栖君……か」

沈みかけた夕陽のせいか、私の顔は随分と赤かった。

○

翌日。

いつもより早い時間に登校した私は、そそくさと己の教室に入る。すると、友達の一人が私の登場に気付き、挨拶をかけてきた。

「おはよう、葵」

「あ、おはよう」

「お？ 葵。あの長い髪の毛、ついに切っちゃったのか？」

「あー、うん。まあね」

「突然だなく。あんなに頑なに切らない切らないって言ってたのに。どした？」

「ちょっとね」

鞆を手にしたまま、私は教室の窓から下を見据える。

そこには校庭のトラックを走っている一人の男性がおり、私は一点に彼を見つめ、新しい大好きな彼に向かって大きくほほ笑んだ。

○

オマケというか、後日談。

「なー、来栖。お前さあ、最近調子悪いみたいだけど、どした？」

「いや…ちょっとな」

「何だよー？ 何隠してんだよ？ 俺達親友だろ。話してみろって」

「…実はさ。ここ連日俺の家のポストに無記名の手紙が入ってるんだ。それに最近、帰り道に誰かに見られてる気がするんだよ」

「げ、マジかよ。それってお前、アレじゃね？ 確実にさ」

「ああ：だよな。俺もそう思う」

「ストーリー純愛者だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513j/>

『ストーカー』と書いて『純愛者』と読むby私

2011年10月5日19時50分発行